

1. 経 緯

(1) 白山国立公園の指定と計画設定

石川県、富山県、岐阜県、福井県にまたがる、標高2702mの白山御前峰を中心とする東西約20km、南北約40km、面積47,402haの地域が、昭和30年7月1日に白山国立公園に指定され、その後、関係市町村や県の強い要望によって、昭和37年11月12日「国立公園」に昇格した。同時に、中宮温泉・新岩間温泉集団施設地区が指定された。また、公園計画（保護計画及び利用計画）が設定され、公園面積の約38%が特別保護地区とされた。

昭和53年には公園計画の再検討がおこなわれ、一部公園区域の変更（394ha増）と利用計画の変更が行なわれた。この時に、保護の施設計画として、別当出合～大汝峰間の植生復元施設が計画決定された。計画目標には以下のように述べられている「別当出合から山頂にいたる主要登山道沿線の自然植生を保護するため、利用により生ずる歩道以外の裸地の植生を復元するとともに、裸地化を未然に防止する」また、新岩間温泉集団施設地区を廃止し、新たに白峰村地内に市ノ瀬集団施設地区が計画され、登山利用の基地として整備するとともに自然教育及び適正な登山利用を促進するため利用規制、利用誘導等を行なうこととされた。

昭和60年から、第一次の公園計画の点検がなされ、利用計画の追加を主とした計画変更が行なわれ、公園区域面積も47,700haとなった。（昭和61年9月12日付け環境庁告示第34号、35号〈官報第17876号〉）

この時に、市ノ瀬集団施設地区の地割計画が決定され、「登山基地、自然探勝、温泉保養等の利用拠点として整備し、ゆとりのある適正な登山利用の促進、山麓部における自然探勝やピクニック等の利用の促進及び教化施設の整備による自然教育活動の促進を図る」とする新たな計画目標が示された。

また、室堂、南竜ヶ馬場の宿泊施設については登山利用者を対象に機能を存続させるが収容力の拡大は行わないという整備方針が決定された。

第一次の点検と並行して「白山国立公園管理計画」が検討され、昭和62年3月に設定された。（環境庁中部山岳国立公園管理事務所 1987「白山国立公園管理計画書」）その中で白山国立公園を北部、中部、南部に分け、「中部白山管理計画区」は、登山利用を主とする、とされた。

(2) 管理方針

本計画区は、白山主峰を中心とした原始性の高い山岳景観を有しており、登山利用を主とする。また、山麓部では、野外レクリエーション利用も盛んである本計画区の管理は、以下の方針を基本として行う。

ア、広さとまとまりを持った山麓部のブナを主とする温帯性落葉樹林および山頂部に広がる高山植物群落を保全する。

イ、室堂ビジターセンターを中心として山頂部の利用者に対し、自然保護教育の推進をはかる。

ウ、市ノ瀬地区は、登山利用の基地としてビジターセンター等の充実をはかるとともに、将来の車利用増大に対応し、市ノ瀬～別当出合間についてはマイカー規制を推進する。

エ、全域にわたる「ごみ持ち帰り運動」を推進する。

(2) 登山関連施設の整備

国立公園指定以前の登山の施設といえば、白山比咩神社の運営する室堂の宿泊施設くらいのものであった。

国立公園指定後は、昭和42年に室堂ビジターセンター及び南竜セントラルロッジに引続き昭和42～44年にかけて室堂宿泊棟、昭和50年に南竜山荘、昭和57年に南竜野営場が完成する等今日まで施設の整備充実が図られてきた。

施設が整備され利用者が増加する一方で、し尿排水による自然環境への影響が懸念されたため、昭和57年に全国で初めて南竜野営場便所においてヘリコプターによる搬出処理を開始した。また、室堂においても昭和60年にくみ取り式の屋外便所を建設し、以降、毎年10月にヘリコプターでし尿を搬出することとなった。

避難小屋は、昭和38年にゴマ平避難小屋が建設され、以降、チブリ尾根、甚ノ助小桜平、シナノキ平、殿が池の順に整備され、平成元年に奥長倉避難小屋が完成した。

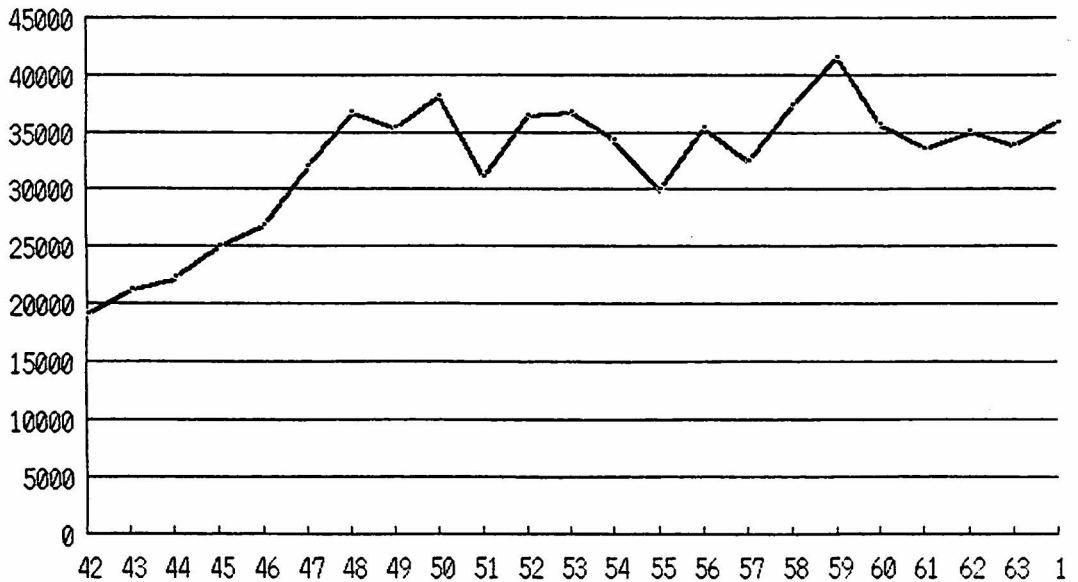
また、別当出合については昭和47年に駐車場及び休憩所が整備され、多くの登

山者を受け入れるようになった。

(3) 登山者数の推移

白山登山者数は、週休 2日制の普及による余暇時間の増大や、都市化の進展により国民の間で自然とのふれあいを求める傾向が高まったこと等から、昭和40年代に急速に増加した。その後室堂周辺の収容力が限界に近づいたこと、野外レクリエーションの動向が高速道路網等の整備された大都市圏からの到達性の良い地域に推移したことなどの理由から、48年以降頭打ちとなり 3万人台で大きな変動はない。

人 グラフ-1



白山登山者数の推移

(4) 保護と利用の調査

白山山系の自然環境について、国立公園指定以降、白山学術調査団、白山調査研究委員会、白山自然保護調査研究会、そして石川県白山自然保護センターなどによって調査研究が進められてきた。それらの成果は、「白山の自然」（石川県 1970）「白山地域自然環境調査報告書」（石川県環境部 1981）「尾添川流域自然環境保全対策調査報告書」（石川県白山自然保護センター 1982）「白山高山帯自然史調査報告書」（石川県白山自然保護センター 1985）などにまとめられ、広い分野で、白山の自然の特徴と重要性が浮かび上がってきた。

一方で、白山国立公園の利用に関しても、多くの調査が実施されてきた。

利用形態や、利用の可能性を調べた、白山麓観光レクリエーション調査（白山観光開発公社 1978）では、多くのソフト面での提言に合わせて、白山一里野～清浄が原ロープウェイや南竜・弥陀ヶ原へのロープウェイなどもあげられた。

また、昭和55年に裏磐梯地域・竹野地域と併せてアンケートを中心に調査した国立公園利用動態等調査（国立公園協会 1981）では、年間4万人程度の登山利用でもすでに植生破壊等の過剰利用現象を起こしつつあり、将来若干の利用者の増加に対処するには、現在以上の保安全管理対策の強化・充実が必要だとされた。その際、夏季特定ピーク利用日への集中によるオーバーユースを季節的分散、地域的分散（特に山麓地域へ）対策により緩和する措置を同時にとることも指摘された。

登山者数の増加にともない、特に室堂周辺や弥陀ヶ原で、登山者の踏みつけによる高山植物の荒廃が目だってきた。そこで、白山への登山者の収容力の限界を明らかにしようと、昭和50年度から「自然公園地域環境容量設定手法研究」が実施された。その結果、白山の高山帯は比較的狭いこと、山頂を目指す白山の登山形態が続く限り、現在以上に大量の登山者を導入することは、さらに高山植物を荒すことになると、強調された。（石川県公害環境部環境保全課 1976、石川県環境部環境保全課 1977）

その後の登山者の動向や今後の登山道のあり方などを探るため、昭和62年度から石川県白山自然保護センターを中心に、登山者へのアンケートなどによる調査を実施してきた。（石川県環境部 1989）

近年再び、別当出合～中飯場間の建設省資材運搬道路に路線バスを運行させる

という地域の要望や、白山の持つ観光資源の掘り起こしといったことが話題になってきた。それにともない、石川県土木部道路建設課による「村おこし道路利用調査」（昭和63年度）や、石川県企画開発部企画課による「白山関連資源利用方策調査」（平成元年度から）が実施されている。

(5) 利用にともなう対策等

① 高山植物群落保護事業

室堂平周辺は十数年前までは特に規制をしておらず自由に散策ができ、キャンプも行われていたため、高山植物が踏み荒され著しく荒廃していた。このため歩道以外の場所を立入禁止にし裸地化した部分の植生を復元するため、昭和48年から石川県により高山植物群落保護事業が実施され効果を上げてきた。

室堂平周辺については土壌浸食を防止するための土木工事は概ね完了し、利用規制のためのロープ柵の更新とパイオニア植物による緑化工事を進めているが、緑化については厳しい環境条件のもとで、十分な成果が出ていない。現在、施肥による緑化促進の調査を行っている。

② 別当出合室堂線歩道事業

弥陀ヶ原の黒ボコ岩から五葉坂までの区間が、登山者の踏圧と流水による浸食で最大、幅約20m、深さ約1.3mにまで拡大荒廃し、利用者に不便をきたしたばかりでなく、周辺植生の破壊や乾燥化を招き、自然環境に深刻な影響を及ぼしたため、昭和54年～55年に事業費約60,000千円をかけて歩道の補修、植生の復元を行った。

③ 白山高山帯歩道整備事業

黒ボコ岩～五葉坂間と同様に、エコーライン及び展望歩道の荒廃が以前より指摘されてきた。このため石川県では平成2年度から歩道周辺の植生・土壌等の調査を行い植生復元や補修工法などを検討することとした。

④ ピーク時対策

市ノ瀬～別当出合間において、7～8月の利用最盛期には週末を中心に、交通渋滞と駐車場不足がみられ、昭和47年頃から地元白峰村が中心となって駐車場整理に当たってきたが別当出合付近での路上駐車や夜間登山者が発生するなどトラブルが絶えなかった。このため昭和63年度に関係各機関が集まり「白山夏

山自動車利用適正化連絡協議会」を発足させ、ピーク時にはマイカーの通行規制を実施するようになった。

⑤ ゴミ持ち帰り運動

白山では登山者の増加に比例してゴミ処理の問題も発生し、山中では処理しきれないゴミが生態系に及ぼす影響も心配されたため、昭和48年に「ゴミ持ち帰り運動」を始め、49年「白山美化清掃事業」として本格的に実施され、昭和52年に公園内の全てのごみ箱を撤去した。

現在では、ゴミ持ち帰りの原則が登山者の間に浸透し、登山道脇に捨てられるゴミの量もかなり減少し、全国的にもゴミのない美しい山として知られるまでになった。